

# 史遊会通信

No. 204 年日  
平成24年1月14行  
12月発

局事務  
03-3712  
0651  
下山田方

例会のお知らせ  
◎ 1月総会

日時 平成24年1月25日(水)  
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階  
社会教育館 第2研修室  
議題 \*23年度事業・会計報告  
\*24年度事業計画他

特集 今年感動した三冊の本  
三戸岡道夫  
木村鷹太郎著  
①『日本太古史』  
著者木村鷹太郎は明治時代の民間歴史研究家で、本書は明治四十四年から四十五年にわたって出版され、上巻が七五四ページ、下巻が九七二ページという巨大、厖大な、異本、奇本である。

内容は複雑極まりないので簡単には記述

できないが、一口に要約すれば、日本の古事記、日本書紀と、ギリシャ神話とを刻明に対比し、その相似性から、(日本の古代はギリシャにあった) という、日本の古代史である。その中の一例をあげれば、天照大神はアフロデティーであり、須佐之男命はヘラクレースであるという。驚くべき内容である。

彼はその学説を「新史学」と名づけ、その内容はさらにエスカレートして、日本を世界文明の起源であると位置づけ、かつては日本民族が世界を支配していたという歴史観になるのである。「新史学」はいわば「日本主義」という国家観であり、世界の中で日本が一番すぐれていたとする、いわば国粹主義である。

その内容の是非はともかくとして、「だめ日本」を唱えていれば安全な日本の歴史界にも、木村鷹太郎のような人物が一人くらい居てもいいのではないか。

◎ 2月例会  
日時 平成24年2月22日(水)  
午後6時～8時  
会場 目黒区民センター 7階  
社会教育館 第2研修室  
講演 小田紘一郎氏  
テーマ 奥の細道を行く  
自由執筆 高橋由貴彦・中山喬央・鍋屋次郎の諸氏  
締切 12月30日

②『信託のすすめ』  
永田俊一著  
講演 蟹游海氏  
テーマ 名曲に潜む詩情  
—古文の楽しさ面白さ

信託とはもつと広く、深く、歴史も古く、人間関係の基本であることをわかりやすく説いた貴重な本である。

信託とは「信じて人に託す」ことであり、託すものは財産だけでなく、政治、事業、社会奉仕、教育、芸術、医療……、人間関係のあらゆる分野に及び、託す人も、託される人も「信用」がなくてはならない。それは、仁義礼智信の人間の道に通ずる、人間関係の基礎である。

③『世界の独裁者』  
六辻彰二著  
二十一世紀になつても、世界に独裁者の国は多い。そのすさまじい独裁ぶりが「世界最悪の独裁者ランキング」（ワシントン

- ボストン週末誌パレード二〇一一年版）により、次にあげる二十名が詳述されている。
- |                    |              |             |               |             |               |
|--------------------|--------------|-------------|---------------|-------------|---------------|
| ロバート・ムガベ           | （ジンバブエ共和国）   | オマル・アル・バシール | （スエーダン共和国）    | 金正日         | （朝鮮民主主義人民共和国） |
| アブドッラー・ビン・アブドルアジーズ | （ミャンマー連邦共和国） | 胡錦濤         | （サウジアラビア王国）   | アリーハメネイ     | （ペルシャ）        |
| イサイアス・アフオルキ        | （エリトリア）      | （中華人民共和国）   | （イラン・イスラム共和国） | メレス・ゼナウイ    | （エチオピア）       |
| グルバンダルイ・ベルディ・ムハメドフ | （トルクメニスタン）   | （カメルーン）     | （エチオピア）       | イドリス・デビー    | （チャド）         |
|                    |              | （スワジランド）    | （ベネズエラ）       | ムスワティ三世     | （ルシア）         |
|                    |              | （カメルーン）     | （ベネズエラ）       | ポール・ビヤ      | （ベネズエラ）       |
|                    |              | （スワジランド）    | （ルシア）         | ウゴ・チャベス     | （ベネズエラ）       |
|                    |              | （カメルーン）     | （ルシア）         | ウラジミール・ブーチン | （ベネズエラ）       |
|                    |              | （カメルーン）     | （ルシア）         | 以上          |               |

### 中山 喬央

①『有史以前乃日本』

鳥居龍蔵著

三戸岡さんが発表された木村鷹太郎の『日本太古史』の内容にびっくりして、その立派な論説を設け次の様に紹介しています。

この本には人類学者・考古学者として中國・シベリア・サハリンから南アフリカまで人類・考古・民俗学の調査研究を行なつた著者の識見がちりばめられており、過激

な内容であるとして発禁処分となつた木村

「いかと思われる」

又明治の終わりから大正の初め頃の、日

鷹太郎（通称キムタカ）の論説に対しても、二〇一頁に希臘波斯説（ギリシャペルシャ説）を設け次の様に紹介しています。

「近時木村鷹太郎君其他の人々が、吾々日本人の祖先に関して、希臘説波斯説を唱えて居られるが、是等の人々は寧ろアイヌに就いて研究する適格者ではあるまいか。先づ波斯説の如きは、アイヌによつて其の研究を遂げたなら、面白い結果を得はします。

この本には人類学者・考古学者として中

本書において著者は、日本古代の民族観を形成する為に、現今日本島の周囲に居住するシベリア各民族、オロッコ、アイヌ、印度支那、馬來、苗と獮羅（雲南原住民族）について考察し、更に三輪山伝説、弓箭、祝部土器（陶）、朝鮮の土器作り、漢族の文学等に就いて触れ、大陸南洋との比較考古学、比較土俗学大成への端緒にしようと試みております。更に記載内容は一般大衆に、この分野への関心を持つてもらおうと、文字には全て振り仮名をつけ、最後に歴史時代の浅草寺と漢族の関係を記しております。全篇を流れるのは著者の思いである「我が日本の人類学や人種学や考古学、史学等の如きは他の自然科学と比較すると世界的ではない。言わば日本内地の学者、否な一派の小数学者の寄合で、之を世俗の言葉で言うと、全く月並式である」と、関連学会の現状を痛烈に批判し、考古学上の事でも外国の事は、モールスやゴーランドの外の智識のないことを歎き、今後我等は一つは日本ので一つは之をインター・ナショナルに世界学術の松舞台に上して研究しなければならないと結んでおります。

本書において著者は、日本古代の民族観を形成する為に、現今日本島の周囲に居住するシベリア各民族、オロッコ、アイヌ、印度支那、馬來、苗と獮羅（雲南原住民族）について考察し、更に三輪山伝説、弓箭、祝部土器（陶）、朝鮮の土器作り、漢族の文

②『人類学上より見たる我が上代の文化』  
(1) 烏居龍藏著  
本書は国学院大学での著者講義内容に基づいて出版されたものですが、我が祖先の民族的色彩や精神的・物質的文化を明らかにする為、原始宗教・民族心理等にも触れております。  
一四六頁『古語拾遺』の項では、「中臣・斎部など祭祀に与る氏々の遠祖は、何れも高天原のオリンパスに居つた神々で此才

リンドバーグの中心となつた大いなる神は、天照大御神である」と述べています。  
③『日本考古学』 八木英三郎著  
本書は国学院大学での著者講義内容に基づいて出版されたものですが、我が祖先の民族的色彩や精神的・物質的文化を明らかにする為、原始宗教・民族心理等にも触れております。  
本書は国学院大学での著者講義内容に基づいて出版されたものですが、我が祖先の民族的色彩や精神的・物質的文化を明らかにする為、原始宗教・民族心理等にも触れております。  
これが日本考古学の学説に多大の影響を与えたと思考しております。

字には全て振り仮名をつけ、最後に歴史時代の浅草寺と漢族の関係を記しております。

①『古事記神話の謎を解く』

村上 邦治

「日本—天皇」「万世一系」を正当化する時期であった。こうした時代背景をもとに作られた古事記は、万葉集や風土記とは次元の違う、まさに日本国の大神話であらねばならなかつた。それ故当時地方や民間で広まっていた神話をそのまま書き取つたものではない。高天原を中心とする垂直的な世界像と、以前から民間で一般的であつた水平的な世界構造を一本化するもので「天孫降臨」は不可欠な神話であつた。

西條勉著・中公新書  
古来古事記神話の研究には、多くの先人が携わり莫大な研究書が残されている。従来の研究は記載の事実をこつこつ積み上げ全體をみようとした帰納法的手法であった。著者は全體像から逆算して、風景をすべて逆にみようとする演繹法的な分析により、改めて古事記神話を読み解こうとする。

古代最大の内乱であつた壬申の乱を経て、天武期は「日本」という國の確立に注力した。対外的には建国から日本誕生の七世紀までを顯示する必要があり、一方国内では

こうして作られた神話であるからこそ、書きかえられるプロセスを読み取る事により、登場する神々の展開する物語は、表面ではバラバラでも内部ではしつかりつなが

つては、難解であつた古事記神話が極めて論理的で整然とした物語に成り変わる。興奮させられる一冊である。

②『巨大古墳の出現』—瀬和夫著・文英堂  
日本独自の前方後円墳は三世紀纏向箸墓古墳から突然開始された。五世紀百舌鳥、古市古墳群を頂点に巨大化を進めるが、その後衰退し七世紀前半で終了する。この時代を解明する文献資料は極めて限られており、日本古代史にとつて考古学の果たす役割は大きい。当著は現代の我々に残された前方後円墳という建造物の最新発掘調査から日本古代の実像に迫ろうとするものである。突発的に出現した箸墓古墳の背景、古墳群の移動、大仁德陵造営の政治経済的意味、東アジアにおける巨大古墳の役割等、著者の主張には納得できるところが多い。

著者は常に出土品という实物をベースに展開するので、説得力がある。

当著の特徴は全国に波及する古墳の形状、出土土器、副葬品等を手際良く整理し図版や写真を駆使して考古学初心者の理解を容易にする工夫が随所にみられることがある。最終章に新聞記者の司会で著者と専門家一人による鼎談がある。著者の文面では推

し量られない思考過程や異説の紹介、ニュース性のある話題についての見解など示唆に富んでいて面白い。

当著は『新・古代史検証・日本國の誕生』全五巻の第二巻である。第一巻は「弥生興亡卑弥呼の登場」で第三巻「ヤマト国家の成立」第四巻「飛鳥の霸者」第五巻「倭国

①『遊女と天皇』 大和岩雄著・白水社  
柴田 弘武

わが子は十余になりぬらん  
巫女（かうなぎ）してこそ歩くなれ

十年近く前に買って積ん読だつたのだが、今年になって読み始めたら巻置く能はず、といった面白さであつた。帯に「遊女の古語はアソビメで、豊穣儀礼（神アソビ）における巫女として、神の一夜妻を意味して

いた。現人神としての天皇と遊女の歴史的関係を、民俗事例と対比しつつ詳細に検討し、日本人の性観念の根源に迫る！」とあるが、その通りであつた。

遊びをせんとや生まれけむ  
戯れせんとや生まれけん  
遊ぶ子どもの声きけば  
わが身さへこそゆるがるれ

『わが身さへこそゆるがるれ』の『わが身』は、そうした屈折し重層した『遊び』『戯れ』心をもつ、今の『わが身』をいうのであり、その『わが身』は『遊ぶ子供の声』で過去の『わが身』を呼びおこし、今と昔の二つの『遊び』『戯れ』心の間で、心が『ゆるがるれ』なのである。』とあり、私は納得する。後白河天皇を「たえず自分の生き方を遊女と重ねて考えていた、希有な帝皇だった」と言い切るのも凄い。

から日本へ』の全巻が既刊されている。いずれもその時代を専門とする歴史学者が分担しており、レベルは高いが読みやすく、理解し易い。最新の調査結果が網羅されており古代史に興味をもつ者には常置したいシリーズである。

頼朝が「日本一の大天狗」といったのも「自分より上手だと脱帽して」言つた言葉だろうとも述べている。

## ②『日本語になつた縄文語』

鈴木健著・自費出版

著者にはすでに『縄文語の発掘』『縄文語からヤマト語へ』等で、アイヌ語は縄文語を引き継いだものであり、アイヌ語を通して古代日本語も解釈が可能になることを主張してきた。今回もそれを「生活のなかの縄文語」「南のはての縄文語地名」「神代のころの縄文語」「縄文語と日本の習俗」等に分類して、わかりやすく証明している。例えば、耳はアイヌ語でキサルという。

記紀に天孫降臨の直前の天若日子の葬儀の時、「川雁を持傾頭者（キサリモチ）」としてとあるが、キサリモチについて『紀』岩波大系本頭註に「語義未詳。持傾頭者の意は、纂書に『死人の頭を擧げる者を謂う』とある」と書かれており、「死人の頭を持ち上げれば自然に傾頭となる。そのとき傾頭を持つ者の両手の位置は耳の後ろにある。キサリ持ち||耳持ち、キサリ||耳である」と解説するが如くである。神代とは縄文時代の頃であろう。

## ③『アイヌ語地名解』

菅原進著・熊谷印刷出版部

青森・岩手・秋田三県の地名をアイヌ語で解釈したもので、上下2冊の大著である。氏の場合は徹底的に現地調査を行つて、その地形・風土を背景にそれを証明していることである。例えば秋田県のアキタの語源について、アイヌ語の「ア・ケ・ウタ」であり、それが音韻変化して、「アクタ」と撥音された。その意味は「燃える・油の・砂浜」であるというのである。秋田市など真ん中辺りの海岸に八橋油田があり、まさにそのものズバリである。

ある引用は、その出典がわからぬ

などなど、先達の経験から生じた数々のユーモラスでしかも哀愁に富む経験則をまとめたものである。多くは都市伝説の類で笑えるが、中には重要な教訓を含むものがある。これが百五円とは、私は幸せな世界に住んでいるものだ。

## ①『マーフィーの法則』

新井 宏  
アーサー・ブロ

ック著・倉骨影訳

アスキー出版局

平成五年版で定価千六百円の本であるが、近所のブック・オフで百五円で買った。

マーフィーの法則とは、「失敗する可能

性のあるものは、失敗する」「失敗するは

ずがないことは、かならず失敗する」「解

決できれば、本当の問題ではない」「誰も

が嘘をつくが、誰も聽く耳を持たないので

問題にならない」「状況がおかしくなると、

おかしな連中が専門家になる」「いろいろな専門家に相談してみれば、どんな意見でも正当化できる」「専門的な知識を持たない人ほど、意見を述べたがる」「エキスピートとは、よそのことである」「おおきな誤りは気づかれない」「できる者は、実行する。できない者は、教える。教える能力がない者は、管理する」「官僚主義に太刀打ちできるのは、官僚主義だけだ」「偉大な芸術家は、すでに死んでいなければならぬ」「落としたトーストがバターを塗った面を下にして着地する確率は、カーペットの値段に比例する」「もつとも価値の

ある引用は、その出典がわからぬ」

な専門家に相談してみれば、どんな意見でも正当化できる」「専門的な知識を持たない人ほど、意見を述べたがる」「エキスピートとは、よそのことである」「おおきな誤りは気づかれない」「できる者は、実行する。できない者は、教える。教える能力がない者は、管理する」「官僚主義に太刀打ちできるのは、官僚主義だけだ」「偉大な芸術家は、すでに死んでいなければならぬ」「落としたトーストがバターを塗った面を下にして着地する確率は、カーペットの値段に比例する」「もつとも価値の

## ②『オーストリア外交官の明治維新』

アレクサンダー・F・V・ヒューブナー著  
市川慎一、松本雅弘訳  
新人物往来社

二十年ほど前に読んだ本であるが、本棚を探しても出てこない。市立図書館から借

りて読んだのかと、探して貰つても見つからない。そこでインターネットのアマゾンで検索してみたら、中古品が百円とか二百五十円の価格で出ている。早速、多少品質の良さそうな二百五十円の本を注文すると、翌日にはもう配達されてきた。送料無料。どうなつてているのだろう。

ヒューブナーは、世界周遊に出て明治四年夏に来日し二ヶ月半ほど滞在している。

若い頃はメツテルニヒの腹心で、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の側近、クリミヤ戦争

を終結するパリ条約ではオーストリア全権

として署名しており、警察大臣も務めた引

退外交官である。その頃までの幕末維新期

の日本で活躍した英國パークスらの外交官に比べたら超大物であり、文人歴史家としても大著『シクストウス五世伝』を残している。そのヒューブナーが、引退を機に日本に滞在したのは、ちょうど廃藩置県が断行された時期であつた。

引退はしていたが、大物外交官であった経験から、英國公使館は休暇で不在のパーカス公使に代わり、代理公使アダムスらがつきつきりで世話をしている。

天皇拝謁のほか、三条実美、岩倉具視、

木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通、徳川慶喜、大隈重信、板垣退助などに会い、折から「廃藩置県」について突っ込んだ議論をしている。

明治維新において、政権中枢が如何に外交を重視していたかが良くわかる。それが翌年の政権中枢部の半数以上が参加する岩倉具視遣米欧使節団につながる。

その後、使節団と留守政権の間に発生した権力闘争は、西南戦役を経て、國際派の勝利に終わる。

### ①「チボの狂宴」

平山 善之

マリオ・リヨサ著・作品社

### ②「わたしが明日殺されたら」

フォージア・クーフィ著・徳間書店

### ③「アマテラスの誕生」

溝口睦子著・岩波新書

今年はアラブの春と言われた。チュニジア、エジプト、リビア等、長年独裁体制下にあつた国で、民衆蜂起の結果、独裁者が倒された。

少し遡るが、①はカリブ海のドミニカ共和国で一九三五年から三十年以上独裁政治

を布いた、トルヒーリョについて書かれた小説。チボとは山羊のことで、トルヒーリョのあだ名。著者は二〇一〇年のノーベル文学賞受賞者である。これを読んで、独裁者というのは、どこも同じだという感を深くした。秘密警察による弾圧、軍による体制護持、個人的蓄財。近代日本がこのような独裁政治を経なかつたことは大変幸せなことであった。日本でもかかる政治体制が生まれていても不思議ではなかつた。しかし日本では国民全般の教育レベルや識字率の高さなどが、それを防いだのであろう。徳川幕府の功績と言つてもよい。小説としても大変面白く、スペイン語圏の大ベストセラーとなつた作品。

②はアフガニスタンの女性政治家の自伝的手記。イスラム圏の文化についても教えられる所が大きい。イスラム社会では女性の地位は低く、学校にも通わせてもらえない児が殆どだという。同国は長く続いた專制的な王政、ソ連との戦い、内戦、タリバーンとの戦い、と、国民は私たちには想像も出来ないような暮らしを強いられてきた。そうした中で、父と兄を暗殺され、夫を獄中の苦労から病死させた主人公が、目に一

字もない母親の苦労で学校を卒業し、二人の娘を育て、国會議員となる。現在、大統領候補にも擬せられているという。しかし彼女自身、いつ原理主義者によつて暗殺されるかわからないという。その時を考えて娘たちへ書かれた手紙から取つた作品名が傷ましい。

私としては、まだイスラム教の一夫多妻制度や、男尊女卑、教育軽視といった側面が理解できない。その土地で生きるために必須だつたにしても、時代と共に、或いは世界の他の国民や宗教に伍していくためには教義も変化して当然と思うのだがこの宗教は余りに頑迷すぎはしないであろうか。また宗教の目的は魂の平安にあると考えるが、この国は宗教が原因の戦火で人々を苦しめているよう思える。

彼女が大統領になつて、この国を幸せに導くように祈つてやまない。

③は日本古代史の出色の学術書を一般向けに解りやすく、新書版にした本。

皇室の祖先は、女の天照大神とされていが本来は高皇產靈尊（タカミムスヒノミコト）という男性神だったという。この神は北方騎馬民族の神で、天孫降臨神話自体、

大陸の神話という。天皇家も大陸出身というわけだ。そして皇室は土着の豪族達と融和する必要から、彼等の神話、イザナギ・イザナミ・スサノオ・アマテラスといった神々を大陸から持参した神話に取り込んだという。かくして伊勢の地方神にすぎなかつたアマテラスは皇祖神に昇格した。

書紀に先だち、古事記において神話融合を実行したのは天武天皇という。

綿密な文献考証と、当時の國際情勢判断が説得力あるものにしている。

### ①『漢文と東アジア——訓讀の文化圏』

金文京著・岩波新書

産経10月30日号で漢学者加地伸行が「東大総長が院の式辞を英語で述べたが留学生

を意識した損得の観念で何たる愚行か。堂

々と国語で、それも伝統的な漢文脈で莊重に述べよ。日本文化を、日本言語を学びに

来た特に非英語圏の学生に失礼ではないか。君子は義道理に論じて「小人は利に論じて」

豊かな近代文学を生んだ日本語が西洋の衝撃を浴び、今英語の世紀の中で亡ぶと説く

憂國論で、後に小林秀雄賞を受賞した。爾來二年、これに真向から反論したのが本

として発展してきた言語である。現代日本

語の優れた文章は古代大和言葉の表記に偶々移入された漢字を用いた為、長い困惑と苦闘の中で工夫発展させ、今日の世界一級の書き言葉に完成させてきたものである。漢文訓讀という人造書き言葉の創造であつた。これは嘗て江戸時代の候文に、更につたアマテラスは皇祖神に昇格した。

近代以降多くの和製単語を生むまでに至る。

本書は漢文訓讀が如何にして生まれたかを探り、レ点、送り仮名等の工夫を追求した。そして「中国が印度から渡來した仏典を翻訳するに際し、梵語を漢語に翻訳するのに用いた記号を應用し、漢語から和語に轉換する記号として發展完成させた」と説く。漢文訓讀の起源を漢訳仏典に求めたユニークな卓論である。

### ②『日本語は死びない』

金谷武洋著・ちくま書房

一昨年の本欄で私は「日本語が死びると

き（水谷美苗著・筑摩書房）」を書いた。

豊かな近代文学を生んだ日本語が西洋の衝撃を浴び、今英語の世紀の中で亡ぶと説く

憂國論で、後に小林秀雄賞を受賞した。爾來二年、これに真向から反論したのが本

書である。

カナダの大学で日本語を教える体験から

日本語を学ぶ学生は増え続け、今や世界で三百万に達し、現代日本人作家の作品が多数英独仏語に即時翻訳出版されていることを紹介し、かつて日本語の歴史に於て数々の危機を逞しく克服しつつ近代言語に変身してきたかを実証的に記す。

主語の不要な文章喻えば「トンネルを抜けると雪国であった」を挙げ、屈折語である西欧語が無理に *The train* を主語に持つてくる不自然な、非文学的な言語という下りは痛快である。

詩の最高峰漢詩にも主語が曖昧な句は多い。「寒雨連江夜入吳」で吳に入つたのは私が船か雨か。その重複か？

本来異質の言語体系である漢語と日本語は、漢字を媒介として類似性を持つが、兩者共通の高い文学性もやはり言語、文字及びその東洋的体質から來るのであるうか。

③『小説日本芸譚』松本清張著・新潮文庫  
運慶、世阿弥、千利休、雪舟、古田織部、岩佐又兵衛、小堀遠州、光悦、写楽、止利、仏師。それぞれの芸術でズバ抜けた作品を残した十人の芸術家。彼らは如何にして各時代の夫々のライバルに勝利し？今日迄そ

の高名を留める作品が残せたのか。

清張は從来の美術史家や学者の書く凡庸な偉人伝から大きく飛躍し、想像を存分に巡らせ、その人間像を浮き彫りにしようとした。高邁な偉人とは別の人格。嫉妬、偏見、獨善、過信、絶望、追従。然も清張らしく資料に忠実で逸脱しない範囲で真実の姿に迫ろうとした。結果的に從来の伝記を越えた人間臭い人物像が現出した。清張の歴史に対する畏怖が題に「小説」と付けさせたのだろうか。そこが却つて成功した芸譚となつた。昭和36年に出版された本だが、半世紀経つても色褪せない。

企業会計原則の本質を暴く著者の目は鋭い。我々が確かなものとして信じきついた、企業活動の根幹をなす利益の危うさを暴露した本作は、見方によつては真に怖い本であると言えるだろう。

話は東西銀行の収益増強委員会のプロジェクトチームの一員に選ばれた梶山が、ある内線電話にセットされた通話テスト用の音楽テープ（それはテスト終了後、たまたま消されていなかつた）を聞きつけたことから始まる。

馬鹿にしないでよ

そつちのせいよ

プレイバック プレイバック

その内線電話へかければ、山口百恵の歌が何時でも聞こえてくる。機械は馬鹿だか

本書は読者に向かつてこのように、企業

ら、トップが掛るまで何時までもなり続けていたと言う訳だ。それに注目したのが梶山であった。彼はシステム部に所属するチームメートと共に、「ソクラクレス計画」という画期的な長期利益増強計画を練り上げる。驚くなれ、この計画の実施により東西銀行は不良債権の処理に悩む銀行業界を尻目に業績を伸ばし、一躍マスコミの寵児に躍り出る。

然らば、東西銀行を一躍優良銀行に成長させた「ソクラクレス計画」とは一体何なのか？それは何時でも利益が上がるようステムであった。東西銀行が計上した利益はコンピューターの計算システムによる架空利益だったのである。

しかし、複雑な計算をコンピューター以上に早く正確に出来ない人間の悲しさ、人は誰もそれを証明できない。架空利益の累計が銀行の資金量を超えない限り、コンピューターは永久に数字の嘘を修正し、山口百恵のテープのように、プログラムに従い永遠に計算し続けるのである。それというのも、利益が単なる数字であるからだ。

このように、本書の説く所は誠に恐ろし

い話である。私は思う。著者はそれを「ソクラクレス」というタイトルで示したのはなかろうか？

言うまでもなく、ソクラクレスはソクラテスとヘラクレスの合体である。ヘラクレスの強靭な身体に、ソクラテスの知恵……まさに鬼に金棒である。しかし、ヘラクレスは女神ヘラの嫉妬で発狂した。ソクラテスは自分の無知を自覚した賢人である。利益とは何かを知らないまま、それを強靭な体力により、狂ったように計算し続けるコンピューター、それは将にソクラクレスの名にふさわしいのではないか？私が本書を推奨する所以である。

そこで検討の対象としたのが毎年開催された日本教職員組合の教育研究集会（教研集会）と沖縄教職員会・組合の教研集会における沖縄問題に関する報告と検討である。日教組は国民教育運動を方針とし、その焦点の一つが沖縄問題である。

だが、日教組は沖縄問題として本土の基地撤去要求の一環として沖縄基地の返還を主張したが、米軍施政下の沖縄の教職員会は祖国復帰を主題とした。そのため、両者の沖縄問題の認識に本質的な温度差があつたが、その後の教研集会では沖縄問題は「民族独立の課題」として施政権返還が焦点になつた。

## ①『沖縄へ復帰』の構造（二〇二一年）

高橋順子著・新宿書房

大学に在職中、大学院研究科で科長に就任した頃の院生のうち、二名が苦節十年、初志を貫徹し、学位論文を完成し、審査の結果、博士号を授与され、文科省の出版助成交付金を得て、学位論文を出版した。

すでに退職した私は、両氏からその出版物を頂戴し、長期に及ぶ研究への努力に心から感動した。そこで、かつての教え子の

沖縄問題は米軍基地を存続させた施政権返還だったが、教研集会の主要なテーマが公害・環境問題に移行し、そのため沖縄問題は米軍の基地公害が焦点になるとともに平和教育の課題として「国内戦としての沖縄戦」の学習が積極的に取り上げられるようになつた（第一章後半、第二・三章）。

次に、平和教育はその一環として沖縄戦の理解、さらに琉球・沖縄文化の学習のために、高等学校の沖縄修学旅行が実施された。筆者は、「沖縄修学旅行において琉球・沖縄文化は、『日本』の多様な文化の一形態となり、それに焦点をあてて考察した。筆者は、「沖縄修学旅行において琉球・沖縄修学旅行において琉球・沖縄文化を体験、消費している」と結論づけている（第四章）。

私のコメントは紙数の制約で省略する。

②『がん園病記の社会学』（二〇一一年）  
門林道子著・青海社

本書のタイトルは「生きる力の源に」だが、ここでは平明なサブタイトルを表示することにした。一九六〇年代後半から最近までに出版された『がん園病記』は約五五

〇冊に及び、都立中央図書館に設置された「鬪病記文庫」には九三一冊が収蔵されている（二〇〇五年現在）。

筆者の夫が「がん」を病み、病院からの帰路、鬪病記を買い求め、不安な心情を癒されたと言う。筆者は夫の死後、私が在職する大学院で鬪病記の研究に着手し、その社会的意義を明らかにしたことが、筆者のグリーフワークとなつた。本書はがん鬪病記の社会学的・学際的研究であつて、その分野の研究者をはじめ、医師・医療関係者（学生を含む）に必ず読まれるであろう。

そのような意味で、本書は洛陽の紙価を高めるのに違いないと信じている。

規定の紙数も尽き、了とされたい。

（友の会）漆原 直子

①「日本の道教遺跡を歩く 隕陽道・修驗道のルートもここにあった」

福永光司／千田稔／高橋徹著・朝日新聞社  
「道教は日本に上陸しなかつた。」といふのが従来の定説とされてきたが、日本書紀には齊明天皇の条で、「田身（たむ）の嶺」に、「また嶺の上の兩つの嶺の樹の辺に觀を起て、号けて兩嶺宮とす。」とい

う記述があり、この観は道教寺院であったという。「田身の嶺」は、今の「多武峰」で、談山神社付近ではないかとされる。他にも、道教思想の影響があるとされている所が日本各地にあり、その縁の地を巡るものである。とはいへ、紹介地は、おおむね西日本、奈良・京都・大阪を中心としていて、奈良は飛鳥・吉野山・大峯山・平城京、京都は丹後半島・赤山禅院・清明神社・吉田神社、大阪は交野・四天王寺庚申堂・能勢妙見山等を紹介している。またその他、三重県伊勢神宮と朝熊山・岐阜県南宮大社、島根県出雲の八雲山・大分県宇佐神宮、福岡県香春岳等を紹介している。日本古来固有とされる文化や信仰形態には、道教の影響を抜きに考えられないとする。私はこれらの方を訪れる時は、この本を片手にして行くようにしている。日本の神話、古墳文化（辰砂や鏡が埋納された理由、古墳の形態）や古代国家の形成過程、宗教形態（神道、仏教との混在）や民族文化そのものを、道教思想で読み解く事ができるのではない。道教についてもつと理解を深めたい。

②「古代文明と気候大変動 人類の運命をえた二万年史」

ブライアン・フェイガン著・河出書房新社  
 現代において地球の温暖化の問題が叫ばれて久しいが、これは今始まつた事ではない。温暖化は約一万八千年前の氷河期の終わり頃より徐々に始まつていて、現代は温室効果ガスの影響で、それが加速される。気候の変化に伴い、北欧の寒冷地帯における寒暖の差や南西アジアから北アフリカにかけての干ばつの度合いにより、人類の定住と移動の仕方に影響をしていることを、「ポンプ」に例えている。人類の歴史を動かす原動力は、気候の変動による影響が大きいとして、これは世界共通の事象である。世界各地の神話には洪水伝承が残されているし、他民族間の侵略戦争も、住む場所を失つた者の生存をかけての戦いであつたりする。著者は、人類の文明史を気候変動というグローバルな視点でとらえている。これらの人類史と世界の環境問題を考える上で示唆的である。

### ③『DNAから見た日本人』

斎藤成也著・ちくま新書  
 近年、米英を中心に独仏日中等の国で、ヒトゲノムの解読が進み、三万個前後あるとされる遺伝子情報がほぼ百%解読された。

ブライアン・フェイガン著・河出書房新社  
 現代において地球の温暖化の問題が叫ばれて久しいが、これは今始まつた事ではない。温暖化は約一万八千年前の氷河期の終わり頃より徐々に始まつていて、現代は温室効果ガスの影響で、それが加速される。気候の変化に伴い、北欧の寒冷地帯における寒暖の差や南西アジアから北アフリカにかけての干ばつの度合いにより、人類の定住と移動の仕方に影響をしていることを、「ポンプ」に例えている。人類の歴史を動かす原動力は、気候の変動による影響が大きいとして、これは世界共通の事象である。世界各地の神話には洪水伝承が残されているし、他民族間の侵略戦争も、住む場所を失つた者の生存をかけての戦いであつたりする。著者は、人類の文明史を気候変動というグローバルな視点でとらえている。これらの人類史と世界の環境問題を考える上で示唆的である。

### ③『幕末 維新の暗号』

（友の会）諸橋 奏  
 特に、ミトコンドリアDNA（母親から子供に伝わる遺伝子）とY染色体（父親から男性にだけ伝えられる遺伝子）から、遺伝子情報の配列の違いによって、あるヒトの集団のルーツや集団間の近縁性についてわかるようになってきた。国立遺伝学研究所には「日本DNAデータバンク」があり、過去の生物、動植物や古代人骨から取り出

る」と。

#### ①『西郷南洲史料』（非売品）

編集兼発行人・西郷吉之助

#### ②『写された幕末 石黒敬七コレクション』

石黒敬七著・明石書店

#### ③『幕末 維新の暗号』

加治将一著・祥伝社

「化物と西郷の写真なし」と譬え種になるくらい、南洲は生涯写真を撮らなかつた。これについて、私の獣祭書齋でその持扱いに苦労している重量六kgの豪華本『西郷南洲史料』は次のように記している。

まず発刊の辞では「明治百年を迎えるに当つて、南洲に関する事柄には事実と異なるものが多ないので、保存されてきた貴重な資料に説明を附し、写真版で出すものであ

されたDNAも、古代DNAとして、データベース化している。こうした遺伝子情報と従来からある、比較形態学、比較言語学、歴史民族学等とクロスさせることで、日本人の起源に迫ることができるとする。遺伝子というナノメートルの世界から、人類の広大な歴史に迫る壮大さを感じる本。

「明治天皇御真影」の説明文には、「天皇より写真を差し出すようにとの御言葉があつたが、南洲は写真撮影をしていない。従つて南洲は生存中に写真をとっていないものと考えている」  
 「南洲の肖像画」では、「伊太利人キヨソネが明治十六年に描いたもので、妻糸子をはじめ郷土の先輩各位に意見を求めて出来上がつた油画で、之が南洲の面影を一番よく伝えるものといわれている。原画は大東亞戦争末期に惜しくも戦災で焼失した」とあるが、巷間には、この絵を見た糸子夫人（大正十一年、八十五歳で病没）は「こんな顔ではなか」と言つたとの逸話が残つ

ところで『写された幕末 石黒敬七コレクション』(初版本は全二冊 石黒敬七編集 アソカ書房)というユニークな本が出版されている。まえがきによれば、編者が大正末頃より在仏の十年を含めて蒐集した古写真約二万点から、明治初年を限界に、それ以前の旧幕時代の歴史篇を掲載したといふ。

当本の明治天皇御写真並びに西郷隆盛肖像画写真は共に『南洲史料』掲載のものと同一である。

「西郷隆盛の写真」について石黒敬章(とんちん館名譽館長)はそのあとがきで、

「折にふれ紙上を賑わす西郷写真新発見は、俗に永山西郷といわれる永山弥一郎の写真」(通称フルベツキ写真の生徒の一人)集合写真の右から二人目の人物(薩摩藩大木喬任であるといふ)が西郷隆盛とされることが多い」と記している。

そして又々近年『幕末 維新の暗号』で

「フルベツキ写真」最後列中央の「ヘラクレスのような身体」の人物が西郷とされ物議を醸した。そもそもフルベツキ写真騒動については『写された幕末』にもその一因があるようだ。というのは、その写真解説

に「安政二年設立 長崎海軍練習所の蘭人教師とその娘をかこむ44人の各藩生徒」と書かれていることからコトが始まっている。

この解説文は編者(石黒敬七)が入手した資料の「台紙の裏に海軍学校とある」とを信じた結果と思われる。この誤りがその後、ミステリーハンターのモチーフになつた。当写真の初見は明治二十三年で、それをとりあげた雑誌「太陽」はその説明文に「フルベツキが佐賀藩(致遠館)の学生と共に撮影した写真」と記している。場所は

(友の会) 中島 茂

○『国会議員の仕事 職業としての政治』

林芳正・津村啓介著・中公新書

東日本大震災を機に国難が声高に叫ばれ、政治の停滞がきびしく批判されているいま、本書(昨年末出版)は一読に値する。

著者は共に現職の国会議員で、林氏(五十歳)はかつての自由民主党の大物政治家

本を見たことが、政治を志す要因になったという。両者の視野の広さや思考の柔軟さはそこに起因するのだろう。

本書は、たがいの政治主張を戦わせる場は余りなく、それぞれが直面した現実を、具体的に正確に描いている点に大きな特徴があり、それが読者を惹きつけていく大きな魅力となっている。

その点で、II部の「国会議員の仕事と生活」で紹介された事実はなかなか面白い。林氏は周辺にかつがれる形で山口県選出の参議院議員となるが、津村氏は民主党の岡山県衆議院議員候補者に公募・採用され、

日本写真術の先駆者上野彦馬の自宅の屋外写場、時は明治元年十月乃至十一月(一八六八年十二月)と、現在では略特定されている。

尚、平成十五年八月二十七日付朝日新聞夕刊に「これが西郷どん? 会って? 描いた肖像画発見」との記事が載った。日田市

文人画家・僧侶平野五岳が明治九年十月頃鹿児島で西郷に会い……と推測しているとの記事であつたが、南洲人気は衰えそうにない。

初回の選挙で当選した。地盤も知名度も財力もない無名の新人が国政の舞台に躍り出る過程がいきいきと描かれている。

また「政治とカネ」の項では、若手議員の津村氏のお金と生活の実態が率直に語られ、「議員の国費の無駄づかい」という世間の先入観に一石を投じている。

ところで、最近の増税必至の情勢の中で、議員定数削減と議員歳費の削減がしばしば論じられるが、私はこの二つを同じ俎上に載せることには疑問を感じている。

たしかに国土の大きさと人口数を考えると、アメリカ合衆国の議員定数、上院二〇〇名、下院四三五名に対し、日本の参議院定数二四二名、衆議院四八〇名はいかにも

多過ぎる。

一方議院歳費や政党交付金は、財力に乏しいが、志の高い有能な若い政治家を育成する上で不可欠の要素であることを指摘したい。「定数を削減し、（議員）一人当たりのバフォーマンスを上げていく必要がある」という津村氏の提言は説得力がある。

最後のV部「職業としての政治」を語ろうとは読みごたえがある。

「民主党は路線を明確化できるか」「これからの日本の経済をどうする」「政治家の資質とは」等、今日の日本が直面する喫緊の課題について、二人の若い政治家が、真摯に具体的に熱い対話をくりひろげている。

自民党政権時代に短期間ながらも二つの

閣僚ポストを経験した林氏がリードしながらも、二人の対話はかみ合う所も多く、実りあるものとなっている。

結び近くで林氏は言う。「これからは日本の方針性そのものを政治がコンセンサスを形成しながら決めていく。……永田町に霞ヶ関と違った意味でのベスト・アンド・

ブライテストがこそって集まり、その中で一番「できる」人が総理になる、ということにしているかないと付けまんね」

国民的合意の形成は並大抵ではないが、我々もまた政治意識を常に高めていかなければならぬだろう。本書を読み終えて、私は日本の政治の行く手に一筋の光が投げかけられた感をうけた。

### 自由執筆

#### 黒船物語（三）

#### —世界情勢と幕末—

（ロシア編Ⅰ）

（友の会）由利 潤一

ロシアという国は十三世紀にジンギスカ

ンの西征以来、いわゆるタタールのくびきの下で永く苦しんでいたが、キプチャク汗国の衰退と共に力を付けて来るのは十六世紀後半のイワン四世（雷帝）の頃からであった。これは日本の歴史では豊饒時代の終わりの頃である。当時、ウラル山脈の東の西シベリア、現在のトボルスクに近いところにシビル汗国と言つタタール人の國があ

り、ロシアがシベリアへ勢力を伸ばす妨げになつてゐた。かねてこの地方の開発を望んでいたストロガノフという実業家が皇帝にシビル汗に対抗するため特權の供与を申し出た。それはコサックを私兵として用いてシビル汗国と戦い、シベリアに進出することであつた。彼が選んだ、當時お尋ね者であつたコザックの頭目イエルマーク・テ

イモフエービッチとその仲間五〇〇人ほどを使ってみたところ、何と僅か二年ほどでシビル汗の首都を陥落させてしまった。皇帝には沢山の毛皮と共に、占領した土地を献上した。喜んだ皇帝はイエルマークの罪を赦し、皇帝の紋章をつけた鎧を与えたという。その後、シビル汗の逆襲に遭い川に飛び込んで逃げようとしたイエルマークは重い鎧のために溺死するようなこともあつたが、結局シビル汗国は滅び、ロシアは自由にシベリア進出を進めることができるようになる。

ロシアのシベリア進出は早かつた。十六世紀の後半に始めて一世紀も立たないうちにシベリアの東端に達している。そして更に十八世紀初めにはカムチャツカ半島全体を占領し、千島列島を蝦夷地へ向けて進み始める。一方ベーリング海峡を越えてアラスカにも手を伸ばす。

アメリカの場合と違つて、ロシアはシベ

リアのいくつかの民族からなる原住民からあまり抵抗を受けなかつた。尖兵であるコサックと雇い主のロシア人は進出先に城砦を築き住民たちから毛皮税を取り立てる。このように支配を確立すると彼らは「走る

宝石」と呼ばれたクロテンを捕ることで満足し、土地は皇帝に献上してしまう。その毛皮は西ヨーロッパで非常に高価に販売でし立地条件の良いものは後世の都市に成長する。

日本では元禄時代にあたる一六九六年（元禄十年）に即位したピョートル大帝は、自ら西欧に赴き新しい文化、技術を学び、帰國後あらゆる面でロシアの近代化に努力した。またスエーデンとの戦争で勝ち取ったバルト海への出口に新しい首都サンクトペテルブルグを建設した。帝はその頃カムチャツカに漂着していた伝兵衛という日本人をサンクト・ペテルブルグで引見し、日本的事情を聞いている。そして同地に日本語学校を開設し伝兵衛を教師に任命して本語学校を聞いている。そして同地に日本が開設されると、ロシアの日本に対する関心の強さが窺がえる。

シベリアのクロテンの捕獲数が減少し、千島列島でラッコの毛皮を狩るようになつて千島の先の先に日本があることを知る。そしてロシアの日本と交渉するという希求はさらに強くなつた。当時日本側では松前

藩の失政もあり幕府の蝦夷地、樺太への直接進出が進み、ロシア人と遭遇の機会を増し、衝突も増えて來ていた。

一七八二年（天明二年）、江戸へ向かう船が難破し、アリューシャン列島のアムチトカ島に一人の日本人が漂着した。大黒屋光太夫である。彼はイルクーツクに送られ日本語の教師になるように勧められたが断つたので、それまで供与されていた手当てを一切止められてしまつた。しかしイルクーツクで出会い知遇を得た北欧出身のエリク・ラクスマンという学士院会員に援助され、彼が首都へ行く機会があつたので光太夫も同行した。首都でのラクスマンの獻身的な尽力でエカテリーナ二世に謁見を許され、光太夫は帰国を訴えた。女帝はイルクーツク総督に命じて日本へロシアとして初の使節を送る。一七九一年にラクスマンの息子の A・K・ラクスマン中尉が使節として総督の書簡を持ち、根室を経て箱館で幕府役人に通商交渉を申し入れた。これは聞き入れられず長崎入港の許可書だけを与えられ、光太夫を送り返し帰国した。